

平村郷土館蔵

「硝石、火薬、花火史全国資料」の 集積と目録の意味について

川 越 重 昌

＝ その 1 ＝

目録って、何とも面白くないもんですね。

今日は敬老の日なので、編集者の高田先生も、きっと平村からお祝いのお菓子を戴いたと思うが、御協力申し上げた私も、練馬区からカステラを戴きました。家内がそれを食べながら、

あなた方の作られている目録を開いた時、小さな音をたてて、金の粉や銀の砂がパッと散るなんてだとよいのにネ、と。

ホントだと思った。だが、事実五箇山の代々が造り続けた床下の土から生み出した硝石は、今では花火に転じて、日本は世界の花火王国となっている。この列島の夏は、夜空を花火の花園に化し、花火師達は海外に迄招かれて、平和祭典のかげの主演となって、その喜びを共にしている。そこには長い風雪に耐えた五箇山、民衆史の影が色濃く、力強く、しかも控えめに、連なっていた。

「何という星にてますか名は知らず、名は知らえねど光りておわす」（謙堂先生作）。その星が、五箇山民衆の一人一人であった。この目録は、その星々の物語が、断片的に散乱しているための集録なのである。二人の爺が五箇山への遺言とし、五箇山数百年の名もなき星々へ、鎮魂の香華として献げる一冊である。

硝石、塩硝、これは五箇山では、合掌造り民家の床下の土へ工夫を加えて創り出した。それは、主食の米作地の無い斜面のみの里々ゆえ、領主加賀藩へ米年貢の代替品として上納し、又主食購入の資とした生命の糧でもあった。従って自らは、これを花火にさえも使わなかったし、鉄砲火薬に造ることもしなかつ

た。その製法を知らなかったのではない。唯、造らなかったのだ。

硝石は遠い遠い昔、支那や印度辺で発見されたらしく、その燃焼力の強烈さを、彼らは権力興亡の殺傷具に利用した。そのため硝石をモンゴルの毒薬ともよばれ恐れられていた。それによって日本人が初めて殺されたのは、元軍が日本へ攻めてきた合戦場であったが、その正体は見破られないまま約250年が去った頃、初めて種子島へ来た外人に教わったという。当時日本は戦乱期で、その製法はまたたく間に戦国大名に依って全国へ拡散。続いて封建大名の領地替などによって再拡散されたが、戦国の時代はこのモンゴルの毒薬も、権力争奪の具となり、他を制圧して100年の争乱を治めた事は、硝石のもっていた一面でもあった。

硝石、焰硝、そして火薬と聞くと、すぐ殺傷力とを感じるか、或は夜空の世界を彩る花園の響宴とを感じるかは、その民族の歴史が、民族へ及ぼした光と陰の強さに由来する。硝石そのものは何の責任もない天真爛漫な存在ではなかろうか。

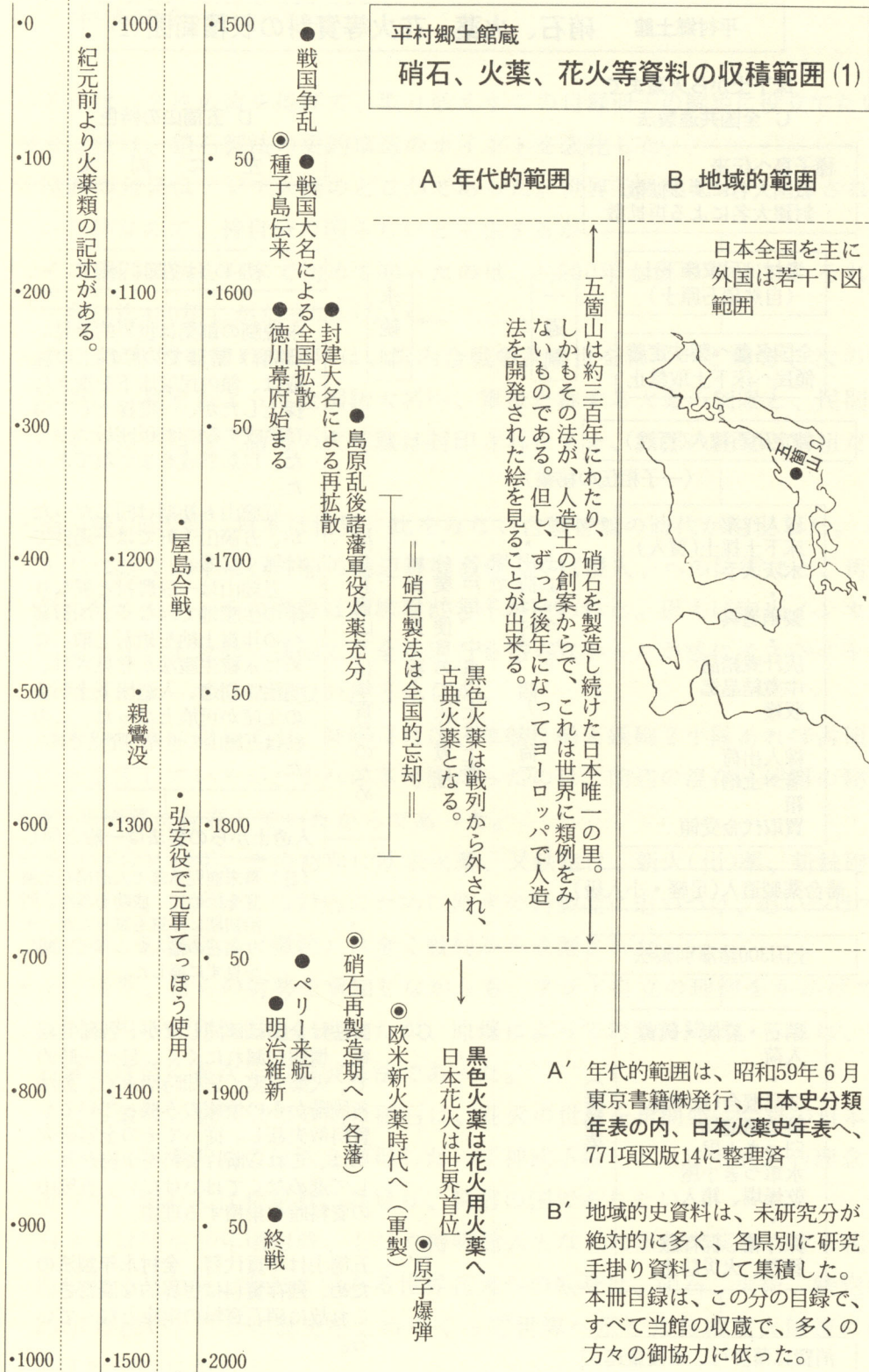
花火とて、その筒を天に向けると花園、その筒を群衆へ向けると絶大な殺傷力となる。

人間の手とて、愛撫も出来るし、首をしめて殺す凶器ともなる。どう使うのか、人間の心次第だ。

五箇山硝石の製造は、五箇山千軒の生命維持のためであった。平家落人として厳しい山谷にひそと住み、親鸞上人の他力本願の教のまにまに、個人を主張することなく、往生をば信じて念仏一筋に子々孫々が、世界的文化遺産と発見された正三角形力学に依る家を創造し、尚その床下の土へ付加価値を与えて生命を全うした五箇山の民へ、どうしてその鎮魂の香華を献げないで居られようか。

平村郷土館蔵

硝石、火薬、花火等資料の収積範囲 (1)



平村郷土館 硝石、火薬、花火等資料の収積範囲(2)

床下土から火薬まで

C 全国共通製法

種子島へ伝来
戦国大名による拡散
封建大名による再拡散

素材は民家床下土
(自然硝石原土)

全国各藩へ製法定着
領民へ床下土取禁止

特定硝石稼人(百姓)

(一子相伝の秘業)

稼人作業
床下土採土(買入)
木灰入手

・製硝道具

・灰汁煮結晶
中煮結晶迄
収穫

・稼人出荷
藩へ上納
箱
買取代金受領

一過制

永続制

・村民全員が稼人
・分業が便なので灰汁煮は
各戸毎、中煮以上は上煮
屋で。
・出荷は村で、個人出荷で
はなかった。

但し五箇山では年貢品のため

藩合葉製造人(足軽・小人級)

全国300諸藩別製法

硝石・麻炭・硫黄
入荷

・3品混合(比率秘)
製造諸道具
臼つき小屋
水車つき小屋
乾燥場、箱入

・保存箱、保存蔵
管理、火災防止

(藩秘業)

消費は藩許可、軍役量迄

D 五箇山の特色

左に同じ

初めは左に同じ

永続制の創業は世界的発見。
(略解) 諸藩での原料土の採取は、領内民家床下を次々に採土したが、一度採土して再び熟成するには50年以上かかった。自然熟成をまつ為であった。

五箇山も初期は同じだったが、五箇山千軒では一過性では無くなる。

五箇山は一般農村と異なり米の生産地ではなく、加賀藩への年貢上納を硝石上納。ために永続生産法が発見され、明治中期迄、人造床下土からの生産が可能となった。この法は五箇山の世界的発見であった。

人造土からの製法は一般と同じ

(註) 幕末鹿兒島藩で人造硝石土積立を始めた。成功をみた。明治初期に陸軍も試みたが、チリ硝石の輸入によって、製品を見ずに廃した。

C' 製法は全国ほぼ同じだが、各藩共秘事、情報が漏れにくく、且つ一時的で、火薬充実、忘却時期永く、製法各段階からの情報のみ残っている。資料散失甚し。従ってその全容研究には、これら断片資料を手掛かりとして進めなくてはいけない。五箇山の資料館へ集積する理由。

D' 五箇山は年貢代替、全村永年製法のため、残存資料は世界的な濃密さ。これ故に硝石資料の宝庫となっている。

＝ その 2 ＝

ここには、2枚の表を掲げて、取り敢えずこの目録冊子の解説に役立てたい。
その1枚は、硝石製法の史的構造のポイントを表化した。

- 硝石の発見はアジア大陸のどこかであった。世界三大発明の一つとされている件なので、皆自分の国らしいと主張するが。
- その硝石製法を日本で初めて知ったのは、1,500年も後のことで、それから今日迄450年しかたっていない。
- その450年間の初めの50年は、国内合戦争乱の世を和平へと導き、次の50年間は、幕府によって全国諸大名へ、軍役と称する火薬の制限と、民間鉄砲不所持の禁令、諸藩の火薬蔵は封印されたまま、狐狸の住家と隣組だった。
- その後200年間、日本は世界に比をみない合戦皆無の時代が出現した。
- それに続く50年は、外船の海辺騒擾あわよくば侵入、への防衛にと、再生産に努めたが、その消費は訓練用に若干が使われた。思えば南米インカ帝国は、僅か十数挺の鉄砲で、全く硝石を知らなかったが故にイスパニヤの船員達によって亡国流浪の民と化した。
幕末の日本に対しても、某国将官は、軍船2船と鉄砲2小隊あれば占領可能と豪語しているが、その不可能だったのは、前述の温存不使用の秘蔵が300諸藩に存在していたからであった。
- それから又50年、その初期に欧米火薬、又鉄砲は、新火(化)薬、新銃砲へと替わり、日本はその対応のために欧米の新製品に追いつけ、追いつけで、旧火薬、旧鉄砲(火縄銃)は全く戦列から放棄された。
- その後期、自らの劣勢を承知しながらも、アジア自立の理想をかかげて、大国を相手に列強国と、戦ったが、原爆によって無条件降伏。それは、硝石輩とは全く異次元の爆破方法であった。
- そして最後の戦後50年の間に硝石は、花火の世界を再開発。今日の日本花火は、世界の首座の位置を獲得した。「神武不殺」とは日本武道の理念であった。願わくば食足り、兵足り、篤信の国でありたい。
- 日本では明治30年頃以降、もはや博物館入となった黒色火薬は、専ら花火用に存命したが、今日の栄ある世界花火への転身は、硝石、火術、鉄砲の2,000年続いた功罪の歴史をしめくくって世界へ示した日本花火師達に依る凱歌ではなかろうか。

- ・五箇山はその硝石を最も長期にわたって、鉄砲薬にも調合せず、花火薬にも調合せず、黙々と年貢代替品として、作り続けた世界唯一の山谷の里であった。

それ故に史的資史料の残存も世界的に密度の高い集積となっているので、それが本目録の骨格となっているのである。

(註) 少し詳しくは、東京書籍KK出版「日本史分類年表」の中の拙稿、「火薬史年表」(昭和59年6月刊)を参照。

＝ その 3 ＝

その2枚目は、床下土から硝石迄と更に火薬迄の製法を略示した。

- ・床下土から硝石を製造する法は、殆ど種子島で伝えられた方法に依り、以来特筆するに値する工夫は五箇山外には見当たらない。
- ・その特筆される部分は、全国では民家床下に自然に熟成され、築年数の長い家の土を選んで採取、原料土としたが、五箇山では人為的に床下土へ手を加え、速成法を開発した。

一般家屋の床下では幾ら永年にわたっても表土10cm位で熟成は止まるが、五箇山では床下土深さ2m弱迄も熟成させ得た。この法の開発は世界的発見で、他国にその例は見られない。ただドイツの例として、屋外に土を積み上げて人造土を作っている絵をみるが、これは極端に降雨の少ない地方かとも思われる。或は石灰を多量投与したろうとの説もあるが、五箇山を越えられない筈である。

- ・全国一般家屋床下土からの採土製造は殆ど一子相伝で、しかも軍役という責任量を果たすと、民間では利用が鉄砲と共に禁制、一過性の採土で、一戸当たり土代は主人一夕の酒代位で、村の産業とはなり得ず、唯、村々を農閑期に廻り歩いて現地で製造した硝石稼人によって、藩許製品が商人によって、集荷され、地方特産品として名の残っているところもある。

それに対して五箇山硝石は、藩との交渉から年貢制となり、五箇山を専従させた。そのため人造法が開発され、尚その結晶完了品も、特に美形大形に工夫され、加賀竿の美名を独占したのである。しかも合掌造り家屋の床下の面積は他地方民家床下面積と仮に同じとしても、その深さに於いて20倍で、その熟成期間は他地方の80年間を5～6年で速成したから、相乗して約260倍という、土地利用の拡大であった。しかも何の生産力もない陽

の当たらない暗い床下の土を。

- その原料土から硝石への製法は、全国共、同じで、種子島で学んだまま。諸道具とて同じだが、地方に依り使用民具に大小があった。全国各地では殆ど、藩許稼人へ製品迄をゆだね、それを購入の形としたが、幕末海防の緊急期になっては、藩が領内村々へ下命、稼人を派遣して半官半民の作業が多くなった。各藩は殆ど鉄砲薬用だったので、中煮に迄仕上げて製品は終わった。

五箇山では、全農全員が稼人で、最初の結晶迄とし、上煮屋が、美形製品として、村自体の名に依って加賀藩へ上納した。藩は自藩用の外は、商人を通して市場へ出して売さばいたが、その客はやはり藩で、僅かに医者のもとへ医薬品として売却されていた。

- 藩へ入った硝石は、各藩毎に鉄砲薬として合薬され、その製法人は総て藩の小人級の人々がその製造実務に当たっていた。その合薬法も亦同じであったが、それでも製法は一子相伝、その合薬所も製品火薬の保存蔵も、すべてがエンショウグラと呼ばれ、厚い生け垣の内へ更に土塁で囲み、一般人のすき見すら出来ない秘業であった。

- 一方花火は、鉄砲の伝来まもなく琉球ルートと支那ルートから、信長の頃には既に伝来しているが、家康が江戸で花火を観て以降、幕府はしばしば江戸町民の花火禁止を下命しても、それは余り守られず、やがて隅田川川開花火が許され、参勤交替によって全国へ普及した。唯、その頃の花火は単純な閃光と音響だったが、明治初期、塩素酸ナトリウムによる着色から、更に昭和3年八重心菊花型花火の発明により、日本花火は平和のシンボルとして世界的名声を博するに至った。

モンゴルの毒薬も日本人に依って、天空へ咲く世界の花として、その終焉を飾ったのである。

＝ その 4 ＝

さて、本目録は、恐れられていた製造史の中から、散見する断片資料と、全国に拡散、それぞれの藩が皆藩の秘法として、ひたかくししていたので、硝石、火薬に関する統一記録も乏しく、不用意に残されてしまった残片記述や、しばしばあった火薬蔵火災を見聞きした民間人の恐怖の手記、何の為かわからない

が、床下土の購入代とか、灰の村割当の供出命令とかが、何の脈絡もなく村方文書に残されたりする。それらが散乱故にこそ、全藩、全県郷土史料の中に、その秘事へ潜入出来る雑々とした糸口、即ち、手掛資料が残されているのである。

一方各県となつての郷土史の研究者も、今日でも火薬扱いは警察の許可がいり、火薬史等を扱う人も極めて少なく、更に戦後は合戦即悪の史観が流行、厳然として存在して世の興亡に関与していたものを避けて通っているようでは、そこから正常な史観が生まれるだろうか。

この目録は好むと好まざるは別として、無合戦200年という時代を出現させた日本にして、初めてその是々非々を論じうる特殊な使命を持つ国ではなかろうか、また原爆被爆国日本だからこそ、その科学とその歴史を知らずして、その恐怖のみを絶叫して事が足りるだろうか。

ここにせめても黒色火薬という古典火薬の、散乱忘失の淵にある残葉を集積して、自らは硝石迄は造っても、火薬迄は造らなかった五箇山へその研究手掛りとなりうる資料を集積し、その目録としても残す由縁である。それは又、花火王国の由来を説く基本史料ともなるのではなかろうか。これら残片資料は、床下土から火薬迄の製法過程の、どこからでも流れだす雨もりのように郷土史料の中へにじみ出ているので、千差万別である。当郷土館は、目録作成後も全国知友の手をへて増補していくが、どのように探っていくかの例として、近日到着寄呈いただいた2つの資料を用いて、その全容へのせまり方を、講本として同資料へ同封する。御参考願えると幸甚である。それは次の二種残片史料である。(1)秋田市肴町資料、(2)土佐藩史料。尚、申す迄もないが、硝石の化学方程式は、幕末に日本へ上陸、明治後期、特に私の学生時代(昭和3年師範学校入学)の化学参考書にも、現代と同じ方程式で出ていた。ただ、方程式から潜入すると、極めて容易だが、それは化学史上の硝石で、稼人達の頭越をしてしまい、硝石、火薬の製造史の苦労は探ることは出来ない。硝石、火薬製造史は化学史ではないからである。

(註) 少し詳しくは、東京書籍KK出版「日本史資料総覧」の中の拙稿、「火薬の発達」(昭和61年5月刊)を参照。

平成7年9月15日誌

あとがき

この目録づくりに取りかかってから、3年目にしようやく出来上がりました。これまで手がけてきた資料集め、目録づくりのような仕事は、これが最後に思われて終着駅に降り立った心境です。

出版に至るまでには、多くの方々の援助とご協力にあずかりました。古文書目録の新史料補充には、利賀村役場の浦辻一成氏に村史編纂業務を兼ねた協力を頼み、ワープロ、フロッピー作成にもお骨折り願っております。

村外史料では、上平村旧家所蔵文書の補充分を「富山県公文書館文書目録」から採録することで、同館のご了解が得られました。「加越能文庫」については、金沢市立玉川図書館近世資料室からご教示をいただきました。

そのほか、お世話になった皆様のお名前は省略をお願いして、ここに厚くお礼申します。

印刷にかかってからも、原稿の加除・修正がたくさん出てきたりしてご迷惑をおかけしたが、誠意をこめて一冊の本に仕上げてくださいました、となみ印刷出版社長 市谷博氏のご厚意を深く感謝いたします。

塩硝資料の整備、展示関係のほか、川越文庫に係わることなど、多くのことを自由に任せてもらえたのは、平村ご当局と担当係の此尾治和君の配慮あっての幸運でした。ここに記してお礼に代えさせていただきます。

先祖たちが開発して発達させた塩硝の科学技術を、郷土の豊かな文化性に置換えて後世へ伝達させるためにも、この冊子が役立ってくれればと思います。

(高田記)

塩硝（硝石）と黒色火薬全国資料文庫
収蔵総合目録

発 行	平成 7 年10月20日
企画・編集	高 田 善 太 郎
発 行 者	平村長 中 村 義 則
発 行 所	富山県東砺波郡 平 村 役 場 平村下梨2,467番地 TEL 0763 (66) 2131(代) FAX 0763 (66) 2130
文庫所在	平 村 郷 土 館 平村入谷139番地 TEL 0763 (66) 2814
印 刷 所	となみ印刷出版 砺波市新又37- 1



利賀村教育委員会